昭和56年度熊谷市埋蔵文化財調査概報

三尻遺跡群・上辻遺跡　下辻遺跡

1982

熊谷市教育委員会

熊谷市 社会教育課

昭和56年度熊谷市埋蔵文化財調査概報

三尻遺跡群・上辻遺跡　下辻遺跡

1 9 8 2

熊 谷 市 教 育 委 員 会

序　文

熊谷市は埼玉県北部の中心であり、歴史的にもゆかりの深い地域であります。このなかにあって、三尻地区は熊谷市の西部にあたり、名勝観音山があり、5月になるとムサシキスゲが咲き、そのあたり一面が黄色く染まります。観音山の南麓にある龍泉寺には、多くの文化財があります。そして、三尻地区は埋蔵文化財も縄文～歴史時代に至るまであり、歴史の深いことがわかります。

この三尻地区において、昭和56年度から県営ほ場整備事業が開始され、埋蔵文化財が破壊される為、記録保存を目的とした発掘調査が行われました。調査は、残暑厳しい9月から、厳冬の2月まで行われました。その結果、古墳時代～平安時代の住居跡が50軒余り発見され、調査地域に大集落のあったことが確認されました。

本報告は、今回の調査概要をまとめてみたものであります。

発掘調査に関して、ご協力下さった県文化財保護課、県深谷土地改良事務所、熊谷西部土地改良事務所、学生及び三尻地区調査参加者の方々に対し、深く感謝の意を表します。

昭和57年3月

熊谷市教育委員会
教育長　関　根　幸　夫

例　　言

1．本書は、熊谷市大字三ヶ尻字上辻・下辻に所在する上辻遺跡・下辻遺跡の発掘調査概報である。

2．本調査は、県営ほ場整備事業（熊谷西部地区）に伴う事前記録保存の為の発掘調査である。

3．下辻遺跡は、深谷土地改良事務所の委託事業により、上辻遺跡は、国庫・県費補助事業によりそれぞれ調査を実施した。

4．発掘調査期間は下記のとおりである。

下辻遺跡　昭和56年９月１日～昭和56年11月27日

上辻遺跡　昭和56年11月28日～昭和57年２月９日

5．発掘調査の担当、本書の執筆・編集は金子正之が行った。

6．調査組織は次のとおりである。

調査主体者	熊谷市教育委員会教育長	関根幸夫
	前教育長	森田芳一
調査員	社会教育課主事	金子正之
調査補助員	東洋大学学生	小林明仁
	東洋大学学生	清水俊明
	国士館大学学生	大沢昌弘
	創価大学学生	吉田　廣
事務局	熊谷市教育委員会社会教育課課長	並木良輔
	課長補佐	里見昌夫
	係長	岡田伸洋
	主事	山川　建
	主事	寺社下博
	主事	金井葉子

7．発掘調査に際し、大澤浩（駒沢大学学生）・田沼亨（東洋大学学生）・江口尚史（大正大学学生）・竹内宇哲（立正大学学生）・吉沢文男（立教大学学生）・福島哲郎（拓殖大学学生）・桜井ひろ子・富田靖雄各氏の協力を得た。

8．本調査に関し、次の方々から御教示をいただいた。記して感謝します。

田部井功、金子真土、斉藤国夫、駒宮史朗、礒崎一、栗原世里子、夏目米蔵、菅谷浩之、高橋俊男

目　　次

序文　　熊谷市教育委員会教育長　　関根　幸夫

例言

目次

挿図目次・図版目次・表目次

Ⅰ　発掘調査に至るまでの経過……1

Ⅱ　発掘調査の経過……1

Ⅲ　遺跡の立地と環境……3

Ⅳ　上辻遺跡……7
　1．遺跡の概観……7
　2．遺構と遺物……7
　　Ⅰ区……7
　　Ⅱ区……14

Ⅴ　下辻遺跡……15
　1．遺跡の概観……15
　2．遺構と遺物……15

Ⅵ　まとめ……15

挿図目次

第1図　遺跡位置図……2
第2図　遺跡と付近の地形図……4
第3図　上辻遺跡Ⅰ区全測図……5
第4図　1・2・3号住居跡実測図……6
第5図　1・2号住居跡出土遺物実測図……8
第6図　3号住居跡出土遺物実測図……10
第7図　上辻遺跡Ⅱ区全測図……12
第8図　5・6号住居跡実測図……13

図版目次

図版1　上辻遺跡・下辻遺跡航空写真
図版2－1　上辻遺跡Ⅰ区全景
2　上辻遺跡Ⅰ区南半部
図版3－1　Ⅰ区1・2号住居跡
2　Ⅰ区3号住居跡
図版4－1　Ⅰ区2号住居跡カマド
2　Ⅰ区3号住居跡カマド
図版5－1　Ⅰ区11～14号住居跡
2　Ⅰ区12号住居跡カマド
図版6－1　上辻遺跡Ⅱ区全景
2　Ⅱ区1～4号住居跡
図版7－1　Ⅱ区2号住居跡遺物出土状況
2　Ⅱ区2号住居跡遺物出土状況
図版8－1　Ⅱ区2号住居跡遺物出土状況
2　Ⅱ区2号住居跡遺物出土状況
図版9－1　Ⅱ区5号住居跡
2　Ⅱ区5号住居跡カマド
図版10－1　Ⅱ区6号住居跡
2　Ⅱ区6号住居跡遺物出土状況

表目次

第1表　Ⅰ区住居跡一覧表……11
第2表　Ⅱ区住居跡一覧表……14

Ⅰ．発掘調査に至るまでの経過

熊谷市は、既に中条地区、万吉地区において、農業構造改善事業が実施され、埋蔵文化財を記録保存する為の発掘調査が行われている。三尻地区においても、ほ場整備事業が計画され、埋蔵文化財が破壊される為、その記録保存を目的とする発掘調査が、昭和56年から実施されることとなった。

昭和56年７月９日付深地第 660号で深谷土地改良事務所から、県営ほ場整備事業熊谷西部地区内にある埋蔵文化財の取り扱いについて協議文書が提出され、昭和56年８月３日付教文第 457号において埼玉県教育委員会から、発掘調査を実施する旨回答がなされた。

これを受けて熊谷市教育委員会が、国庫・県費補助金・農政側負担金および市費をもって調査を実施することになった。

事業計画によると工事は、微高地上にある桑畑の抜根整地、水田の整地及び道水路のパイプ埋設であった。桑畑は、面的に削平される地点が２ヵ所あったので、その部分を中心に発掘を行い、道水路と水田の部分はトレンチ発掘を実施することにした。

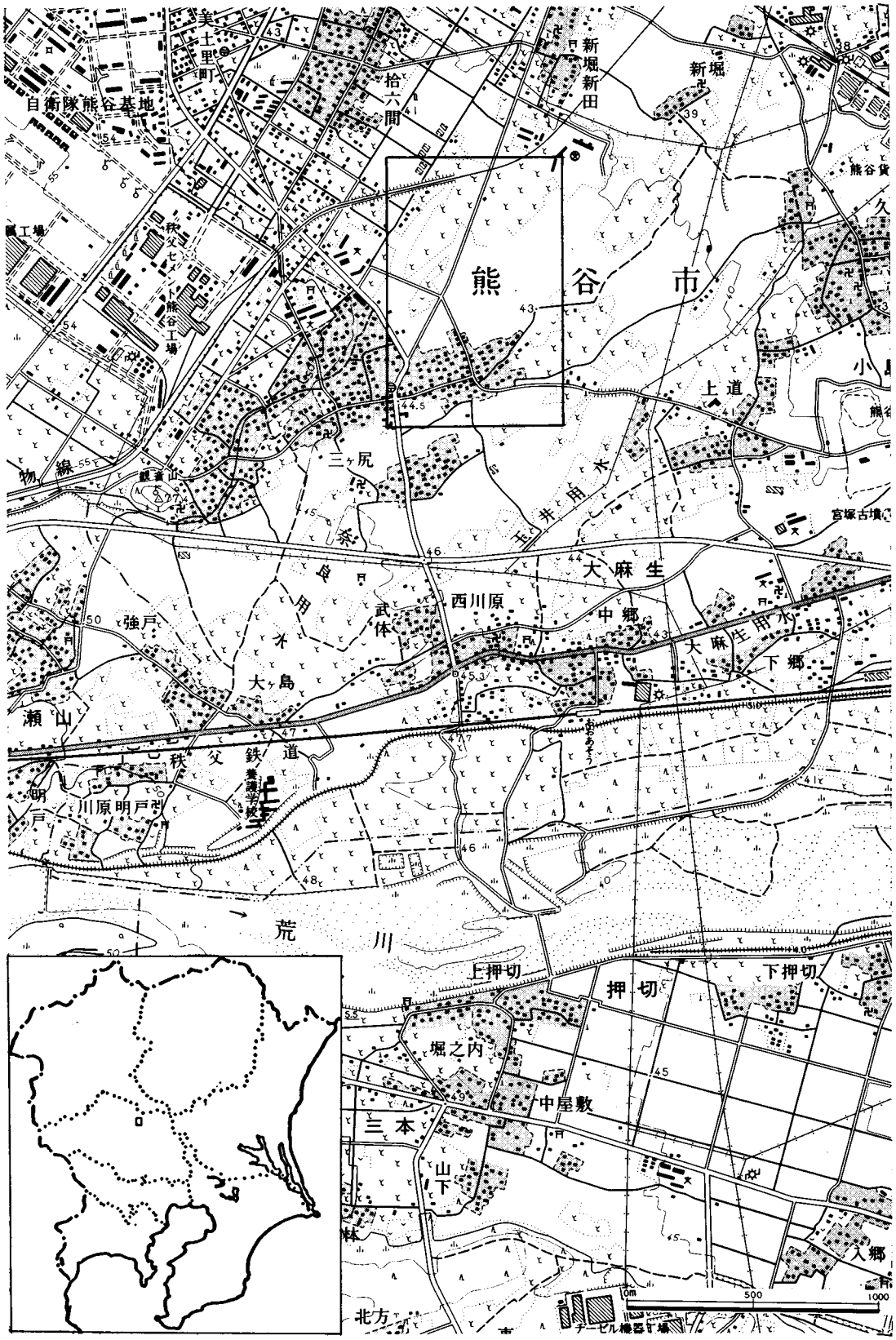
発掘調査は、昭和56年９月１日に開始された。

Ⅱ．発掘調査の経過

下辻遺跡は、大きく削平されることがないので、まず土層堆積状態及び、遺跡範囲の確認を兼ねて、下辻遺跡の道水路部分のトレンチ発掘を行った。トレンチの幅は１ｍで、長さは、道水路の長さに応じて 100ｍ前後であった。北から１Ｔ・２Ｔ…と呼称して計５本のトレンチを調査した。その結果、住居跡21軒・溝跡・ピット等が検出され、下辻遺跡は県の遺跡地図には載っていなかったが、遺跡（集落跡）であることが確認された。

上辻遺跡は、面的に削平される部分が２ヵ所あり、南側をⅠ区、北側をⅡ区と呼称し、Ⅰ区から調査を実施した。Ⅰ区・Ⅱ区ともに、１辺５ｍのグリッド方式を用いて調査を行い、南隅をＡ－１とし、北西へＡ・Ｂ・Ｃ…、北東へ１・２・３…と呼称した。Ⅰ区は土層堆積状態を知る為、トレンチを入れ、耕作土・暗褐色土・ローム層の順に堆積していることが確認された。調査は、重機によって表土剝ぎを行いローム面まで掘り下げ、精査をして遺構確認をした後、各遺構ごとに掘り始めた。ローム層が堆積しており、遺構の検出は比較的容易であったが、遺構の覆土である暗褐色土が、荒川の氾濫によって堆積したと思われる粘質の土層であり非常に硬くて、雨も降らず、少し降っても水が浸みこまないで、調査はこの土の硬さになやまされた。

調査の結果、住居跡が50軒余り検出され、多量の土器・鉄製品・石製品等が出土し、調査地域に大集落のあったことが確認されて、昭和57年２月９日に調査は終了した。



第１図　遺跡位置図（□第２図の図示範囲）

Ⅲ．遺跡の立地と環境

熊谷市は、西側に櫛挽台地と江南台地があり、その東側に荒川の扇状地である熊谷低地が広がっている。三尻地区は、櫛挽台地と熊谷低地の境界に位置しており、上辻・下辻遺跡は熊谷低地に立地している。熊谷低地の中でも、本遺跡は荒川の自然堤防上に位置しており、標高42～43ｍで南西から北東へ向かい若干傾斜している。本遺跡の所在している自然堤防の東側と西側にある水田面との比高差は、約１ｍである（註１）。

次に周辺の遺跡について簡単に述べてみると、上辻・下辻遺跡の南西の櫛挽台地には、弥生時代中期の須和田式土器を出土した三ヶ尻上古遺跡（註２）や三ヶ尻古墳群（註３）が所在する。三ヶ尻古墳群は、古墳時代後期の古墳群であり、ほぼ 500ｍ四方に散在し、前方後円墳１基を含み、現在20数基の古墳が知られている。最近、上越新幹線建設及びそれに伴うセメント工場の貨物引込線拡張により、埼玉県教育委員会が発掘調査を行い、18基の古墳及び古墳跡（三ヶ尻林及び三ヶ尻天王遺跡）を検出している。三ヶ尻林遺跡の４号古墳（やねや塚）は最も良く当時の姿をとどめており、墳丘の高さは約３ｍ、墳麓直径は18ｍでほぼ正円形である。石室は全長６ｍで、玄室はやや胴の張る長方形プランである。墳丘には円筒埴輪のほかに、人物・靫・馬等の形象埴輪及び須恵器の大甕破片が認められている。石室内から直刀・鉄鏃・刀子・耳環・ガラス小玉・土製丸玉・銅釧等が出土している。前庭部付近からは、須恵器の提瓶・小型高坏・短頸壺が出土している。このやねや塚の石室は、現在、観音山の南麓に復元して保存されている。

上辻遺跡の西に位置する三尻中学校からは、鬼高期終末・真間期・国分期の住居跡が16軒調査されている（註４）。

下辻遺跡の北東に位置し、県立熊谷西高校敷地内にある樋之上遺跡からは、住居跡55軒、掘立建物跡２棟、溝26本、小竪穴群等が確認されている。住居跡は鬼高期終末のもの７軒、真間期のもの６軒、国分期のもの42軒にわけられる（註５）。

これら三尻中学校遺跡と樋之上遺跡とは、本遺跡と時期的にほぼ同じであり、位置も非常に近くて関連の深いものと考えられる。

本遺跡の東南には、広瀬古墳群・石原古墳群が分布している。広瀬古墳群は、上円下方墳である宮塚古墳を含み、９基前後の古墳が確認されている。石原古墳群は、四八塚として多くの古墳が存在していた。石室の壁は川原石を利用し、天井は秩父青石の平石を用いて構築されていた。出土遺物は埴輪・須恵器・土師器・直刀・金環・管玉など知られている。

註１．堀口萬吉「埼玉県の地形と地質」　埼玉県市町村誌総説編　昭和55年

註２．高山清司「三ヵ尻上古遺跡」　埼玉県土器集成４　昭和51年

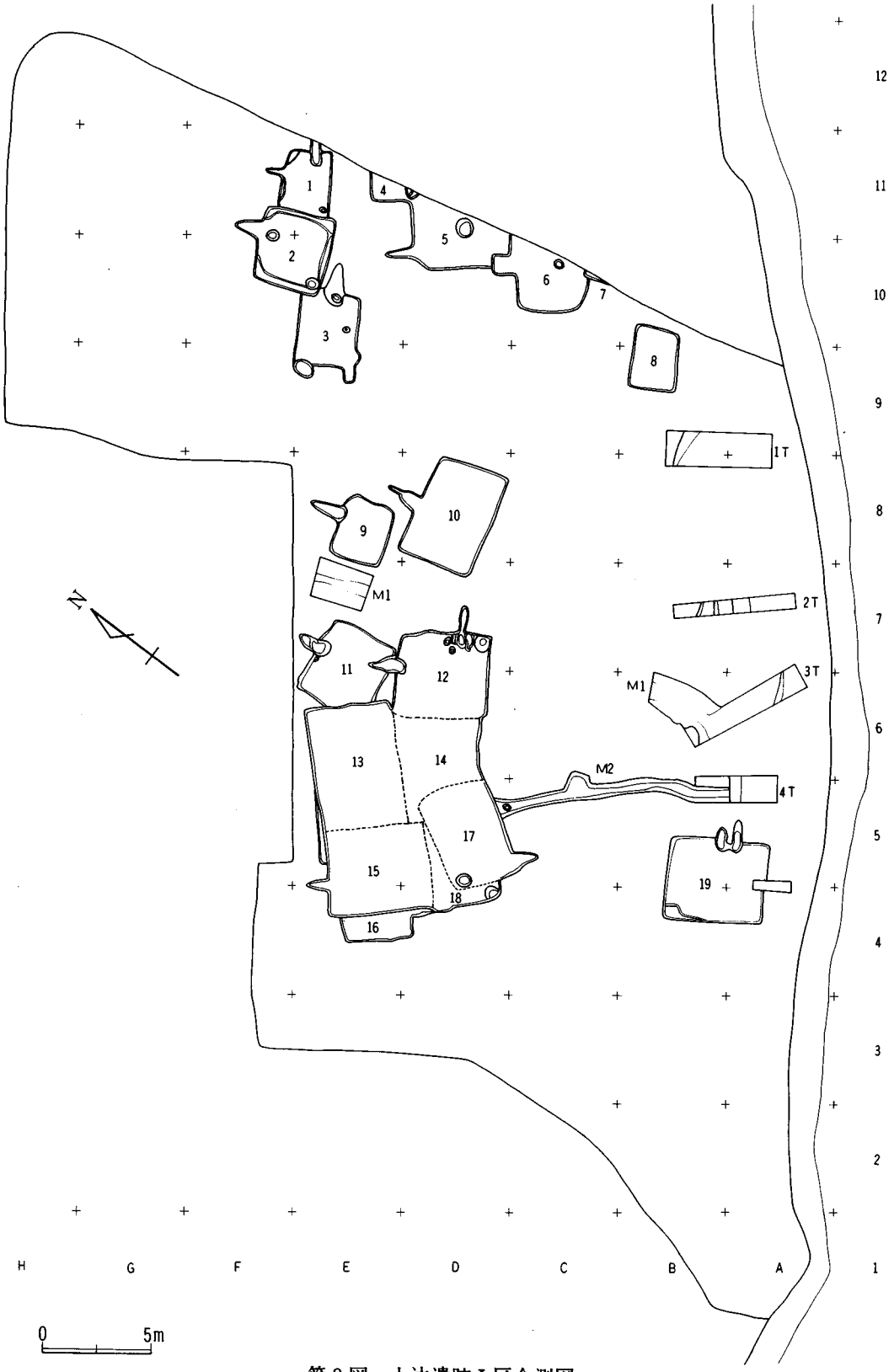
註３．「三ヶ尻古墳群」　新編埼玉県史資料編２　昭和57年

寺社下博「三尻No.80古墳」　昭和54年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　昭和55年

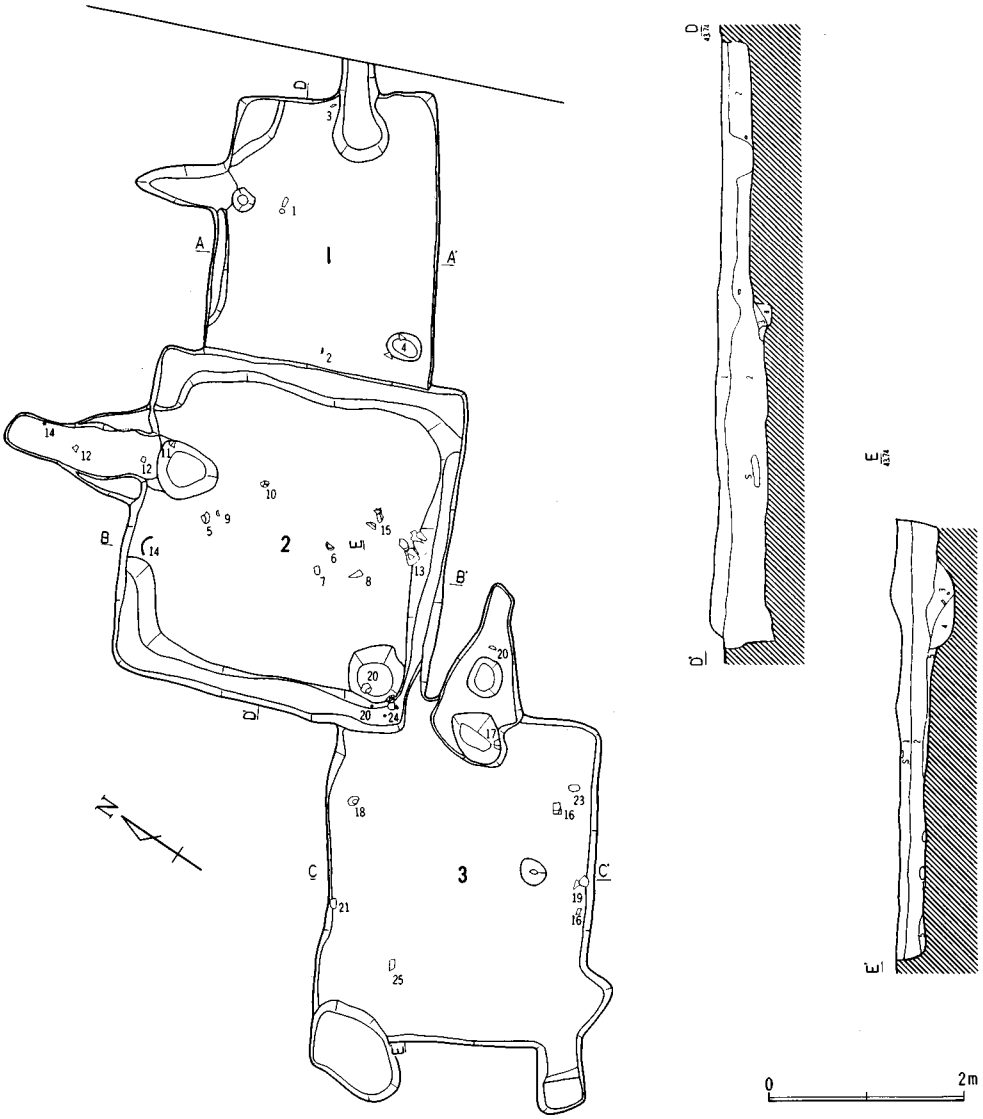
註４．昭和55年に熊谷市教育委員会が調査した。

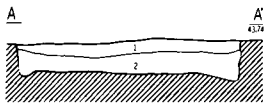
註５．小川良祐・金子真土「県立熊谷西高校（樋之上遺跡）体育館予定地の発掘調査及び校舎・管理棟・体育館予定地出土遺物の整理」　資料館報No.９　埼玉県立さきたま資料館

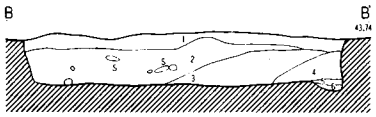
第２図　遺跡と付近の地形図

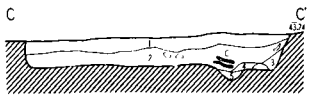


第３図　上辻遺跡Ｉ区全測図









A－A′
1．暗褐色土（ローム粒子を含む）
2．暗褐色土（ローム粒子を多く含む）

B－B′
1．暗褐色土（ローム粒子を含む）
2．暗褐色土（ローム粒子を多く含み、ロームブロックも少し含む）
3．暗褐色土（ローム粒子、ロームブロックを含み、炭化物も含む）
4．暗褐色土（ローム粒子を含む）
5．黄褐色土（ローム質）
6．暗褐色土（ロームブロックを含む）

C－C′
1．暗褐色土（ローム粒子を少し含む）
2．暗褐色土（ローム粒子及びロームブロックを含み、1部炭化物も含む）
3．暗褐色土（ローム粒子を含む）
4．暗褐色土（ローム粒子を多く含む）
5．暗褐色土（ロームを多く含む）

D－D′
1．暗褐色土（ローム粒子を含む）
2．暗褐色土（ローム粒子を多く含み、ロームブロックも少し含む）
3．暗褐色土（ロームブロックを含む）
4．黒褐色土

E－E′
1．暗褐色土（ローム粒子を含む）
2．暗褐色土（ローム粒子及びロームブロックを含む）
3．黒褐色土（ローム粒子を少し含む）
4．暗褐色土（ロームブロックを多く含む）
5．暗褐色土（ロームを多く含む）

第4図　1・2・3号住居跡実測図

Ⅳ．上 辻 遺 跡

1．遺跡の概観

上辻遺跡は、荒川左岸にある自然堤防上に立地しており、今回の調査区は面的に削平される２地点であった。調査区は、南側をⅠ区、北側をⅡ区と呼称し、Ⅰ区から調査を実施した。遺跡は、荒川の氾濫を受けたらしく住居跡の覆土である暗褐色土が非常に硬く、調査は土の硬さになやまされた。Ⅰ区は奈良～平安時代の住居跡19軒、溝跡２本が検出された。住居跡は掘り込みが深く、残存状態の良好なものが多かった。だが、柱穴と考えられるピットをほとんど確認できなかったことは非常に残念であった。住居跡は複合しているものが多く、11号～18号住居跡などは、８軒も重なっていた。Ⅱ区は古墳時代後期・奈良～平安時代の住居跡10軒、溝跡１本が検出された。Ⅱ区を調査したことにより本遺跡が、古墳時代から続いて営まれていたことが確認された。溝跡覆土からは縄文式土器の破片も検出され、縄文時代の遺構もあることが想定される。

2．遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、Ⅰ区から住居跡19軒、溝跡２本、Ⅱ区から住居跡10軒、溝跡１本であった。Ⅰ区１～３号住居跡、Ⅱ区５号・６号住居跡については、概要を報告し、他の住居跡に関しては一覧表で示すことにした。

Ⅰ区

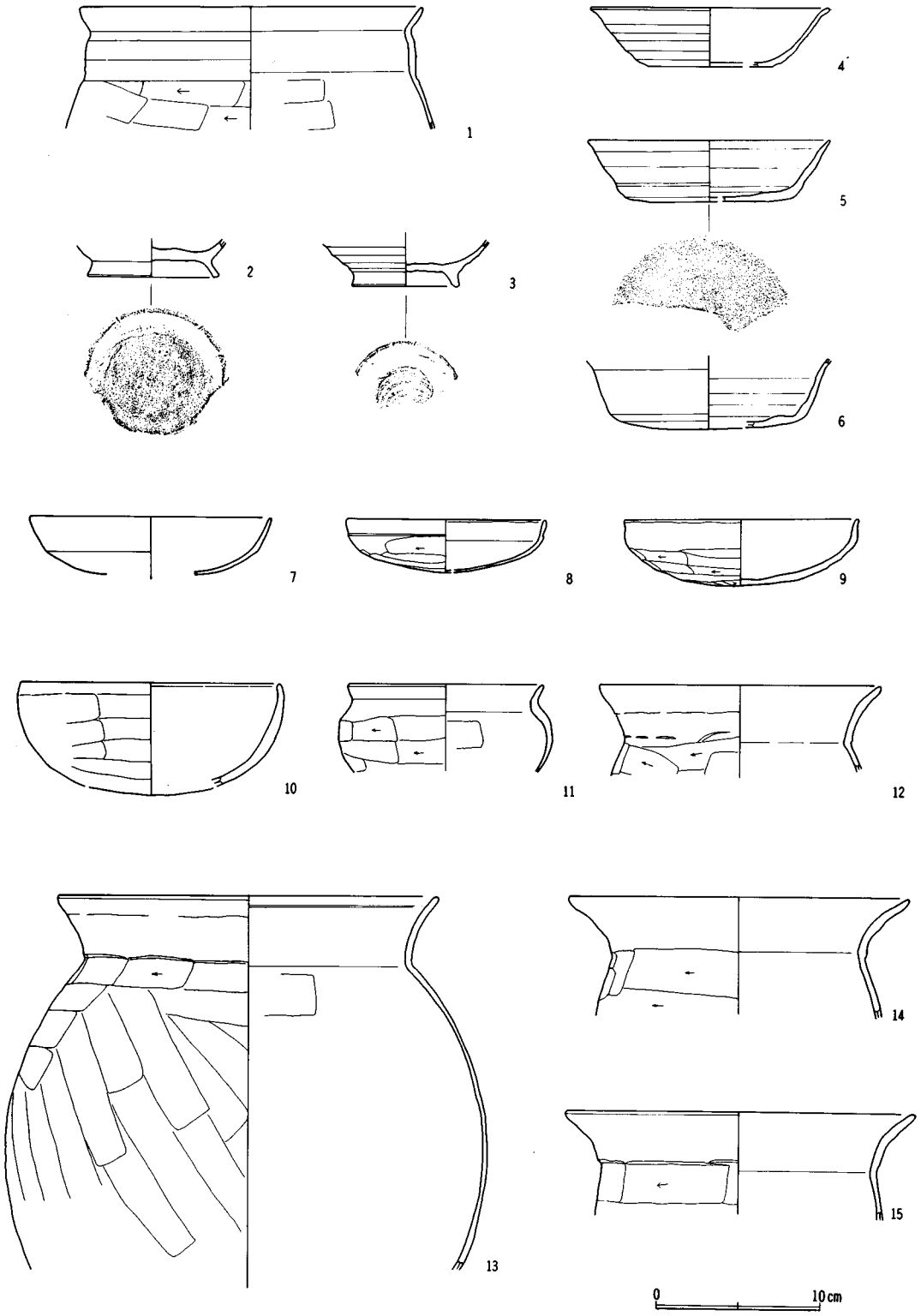
Ⅰ号住居跡（第４図、図版３－１）

２号住居跡と複合しており、西壁が確認できなかった。規模は南北方向が2.29ｍで、長方形を呈す。長軸はＮ－63°－Ｅを示す。壁の深さはローム面から40～25cmで、壁溝は北壁に沿って検出された。カマドは北壁と東壁に認められた。前者は焚口部に径24cmのピットがあり、煙道部は壁外へ約84cm掘り込まれ、ゆるやかに上っていた。後者は燃焼部の幅が約56cmで、煙道部の先端は調査範囲外で確認できなかった。両者とも煙道部の壁は、よく焼けていた。南西隅には径 2.8× 3.6cmのピットが１本検出された。

Ⅰ号住居　出土遺物（第５図）

１は甕形土器の口縁部であり、口径21cmである。胎土には中粒砂が多く見られ、焼成は良好である。色調は茶褐色だが、外面の肩部は二次焼成を受けて黒い。残存率は、口縁部の20％である。

２～４は須恵器の坏形土器である。２は高台が貼付され、底部整形痕は不明瞭である。大きさは底径 7.2cm、高台径８cmである。胎土には細礫が多く含まれ、粗粒砂も含む。焼成はやや軟質で、色調は淡黄褐色である。高台は半分欠損している。３も高台が貼付され、底部に回転糸切り痕が見られる。大きさは底径 6.5cm、高台径 6.6cmである。胎土には細粒砂が含まれ、焼成は良好である。色調は灰白色で、残存率は底部の50％である。４は口径14.6cm、底径 7.5cm、器高 3.6cmである。胎土には１～２mmの茶褐色粒子が多く含まれ、焼成は軟質である。色調は淡黄褐色で、残存率は15％である。土器以外に、土錘も出土している。



第５図　１・２号住居跡出土遺物実測図

2号住居跡（第4図、図版3－1・4－1）

規模は東西3.55m、南北 3.3mで、ほぼ正方形を呈す。主軸はN－21°－Wを示す。壁の深さは、ローム面から50～35cmである。壁溝は、カマドの部分を除いて一周しており、幅36～20cm、床面からの深さは約10cmである。カマドは北壁にあり、焚口部に54×62cmのピットが認められ、壁外には1.42m掘り込まれている。南西隅には、径58×60cmのピットが一本検出された。

2号住居跡出土遺物（第5図）

5、6は須恵器の坏形土器である。5は口径14.8cm、底径10.2cm、器高 3.7cmであり、底部は回転ヘラ削りされている。胎土には粗粒砂が多く含まれ、細礫も少し含む。焼成は良好で、色調は淡黄褐色である。残存率は30%である。6は底径10.7cmで、底部は回転ヘラ削りされている。胎土には粗粒砂が多く含まれ、焼成は良好である。色調は暗褐色で、残存率は30%である。

7～9は土師器の坏形土器である。7の口径は推定14.6cmで、整形痕は不明瞭である。胎土には中粒砂が多く含まれ、焼成はやや軟質である。色調は茶褐色で、残存率は20%である。8は口径12.3cm、推定器高 3.2cmである。口縁部は横ナデされ、体部はヘラ削りされている。胎土には粗粒砂が多く含まれ、焼成は良好である。色調は茶褐色で、口縁部に黒斑が見られる。残存率は30%である。9は口径14.2cm、器高4cmである。口縁部は横ナデされ、体部はヘラ削りされている。胎土には粗粒砂が多く含まれ、焼成は堅緻である。色調は淡褐色だが、体部外面は黒色である。残存率は40%である。

10は土師器の埦形土器である。口径は推定15.7cmであり、口縁部は横ナデされ、体部はヘラ削りされている。胎土には中粒砂が多く含まれ、焼成は良好である。色調は茶褐色で、残存率は20%である。

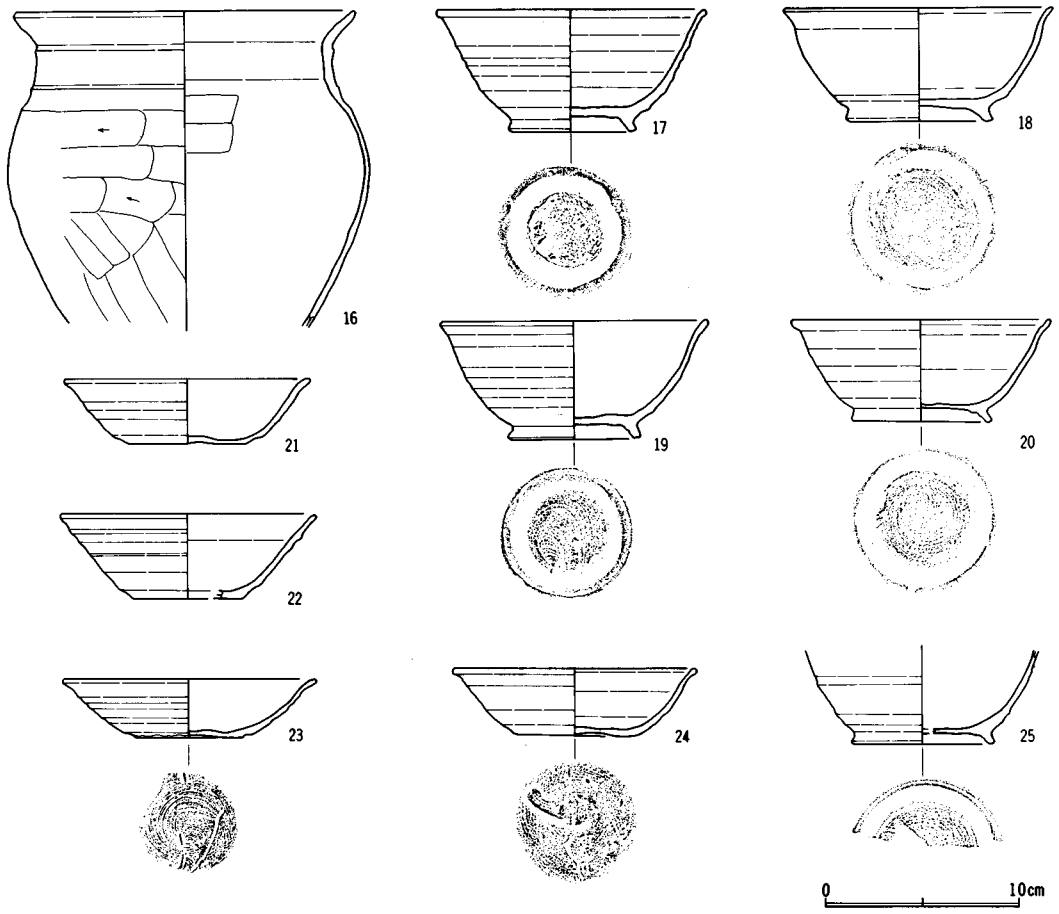
11は土師器の小型甕形土器である。大きさは口径12cm、頸部径11.3cm、胴部最大径13.2cmである。口縁～肩部は横ナデされ、胴部は横位にヘラ削りされている。胎土には粗粒砂が多く含まれ、焼成は良好である。色調は茶褐色で、残存率は胴上部の40%である。

12～15は土師器の甕形土器である。12は口径17.2cm、頸部径13.8cmで、口縁部は横ナデされ、肩部は横位にヘラ削りされている。胎土には中粒砂が多く含まれ、焼成は良好である。色調は茶褐色・淡褐色である。残存率は口縁部の80%である。13は口径23.2cm、頸部径20cm、胴部最大径29.3cmである。口縁部は横ナデされ、肩部は横位に、胴部は斜位にヘラ削りされている。胎土には中粒砂が多く含まれ、焼成は良好である。色調は茶褐色で、残存率は口縁部が50%、胴部が30%である。14は口径20.7cm、頸部径15.5cmである。口縁部は横ナデされ、肩部は横位にヘラ削りされている。胎土には中粒砂が多く含まれ、焼成は良好である。色調は茶褐色で、残存率は口縁部の60%である。

本住居跡からは、川原石が多く検出された。

3号住居跡（第4図、図版3－2・4－2）

規模は東西 3.4m、南北2.75mで、長方形を呈す。主軸はN－60°－Eを示す。西壁には、49×68cmの長方形の張出し部と、1.14×0.74mのピットが検出された。壁の深さは35～25cmで、壁溝は認められなかった。カマドは東壁に認められ、焚口部には48×64cmのピットが掘り込まれている。



第6図　3号住居跡出土遺物実測図

煙道部は、壁外へ 1.3m掘り込まれ、ゆるやかに上っている。カマドの北側の袖に、川原石が立てられ、これは袖石と思われる。

3号住居跡出土遺物（第6図）

16は土師器の甕形土器である。大きさは口径17.6cm、頸部径15.3cm、胴部最大径18.6cmである。口縁部は横ナデされ、肩部は横位に、胴部は斜位にヘラ削りされている。胎土には粗粒砂が多く含まれ、焼成は良好である。色調は茶褐色で、胴部外面は二次的加熱を受け暗褐色である。残存率は口縁部が75%、胴部は20%である。

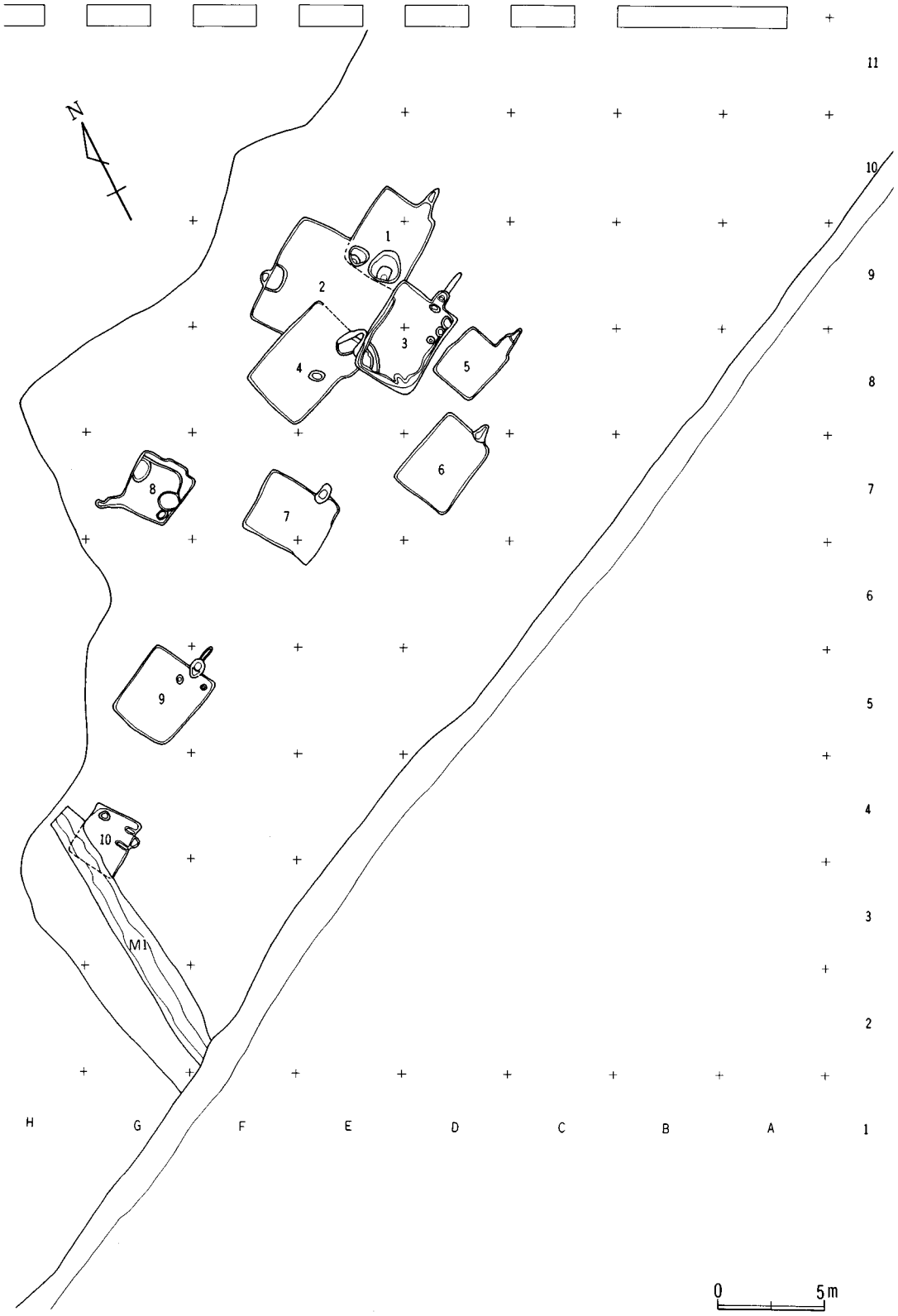
17～25は須恵器の坏であり、17～20、25は高台が貼付されている。17は口径13.9cm、底径 6.4cm、高台径 6.6cm、器高 6.3cmである。底部は回転糸切りにより切り離されている。胎土には粗粒砂が含まれ、焼成は良好である。色調は暗灰褐色で、残存率は底部が完存、体部は20%である。18は口径13.9cm、底径 7.3cm、高台径 7.6cm、器高 5.9cmである。底部は回転糸切り痕がわずかに残る。胎土には粗粒砂が多く含まれ、焼成はやや軟質である。色調は灰白色で、残存率は底部が完存で、体部は30%である。19は口径13.9cm、底径6.4cm、高台径6.9cm、器高6.2cmである。底部は回転糸切りによ

第Ⅰ表　Ⅰ区住居跡一覧表

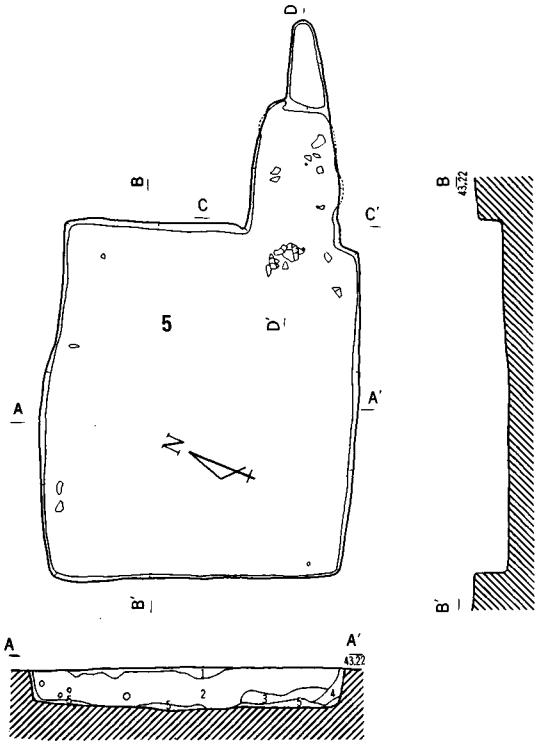
住居跡No.	規模(m)	主軸方位	カマド位置	ピット	貯蔵穴	壁高(cm)	時期	備考
1	2.29×	N－63°－E	東壁、東南寄り	1		40～25	国分	土錘出土
			北壁、北東寄り					
2	3.30×3.55	N－21°－W	北壁、北東寄り	1		50～35	真間	
3	2.75×3.40	N－60°－E	東壁、北東寄り	2		35～25	国分	
4								
5	4.60×	N－37°－W	北壁、北西寄り	1		30～20	国分	鉄滓、埴輪出土
6	3.10×	N－34°－W	北壁、北西寄り	1		25～15	真間	
7								
8	2.10×2.80	N－62°－E				35～30	国分	
9	2.40×2.80	N－14°－W	北壁、北東寄り			40～35	真間	土錘出土
10	3.45×4.90	N－12°－W	北壁、中央			40～30	国分	
11	3.90×3.85	N－8°－W	北壁、中央			60～45	国分	
12	4.30×4.10	N－35°－W	北壁、中央	2	1	58～30	国分	紡錘車、砥石出土
			東壁、東南寄り					
13						18	国分	
14						28	国分	
15	4.00×	N－43°－E	北壁、北西寄り			47～40	国分	
16	3.30×					30		
17		N－52°－E	南壁、南西寄り	1		40～27	国分	
18				1		27		
19	4.55×4.00	N－61°－E	東壁、中央			60～55	国分	鉄製品出土
			東壁、東南寄り					

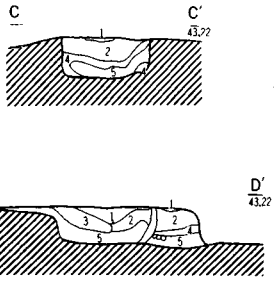
り切り離されている。胎土には粗粒砂が多く含まれ、焼成は良好である。色調は暗灰白色で、残存率は70％である。20は口径13.4cm、底径6.9cm、高台径7.2cm、器高5.3cmである。底部は回転糸切りにより切り離されている。胎土には粗粒砂が含まれ、焼成は良好である。色調は灰褐色で、残存率は70％である。25は底径 7.1cm、高台径 7.4cmである。底部は回転糸切りにより切り離されている。胎土には中粒砂が含まれ、焼成は良好である。色調は暗灰白色で、残存率は底部の45％である。

21は口径12.7cm、底径 6 cm、器高 3.4cmで、底部整形痕は不明瞭である。胎土には粗粒砂が多く含まれ、焼成は良好である。色調は灰褐色で、残存率は40％である。22は口径13.2cm、底径5.5cm、器高 4.4cmで、底部整形痕は不明瞭である。胎土には粗粒砂を多く含み、焼成は良好である。色調は灰褐色で、残存率は50％である。23は口径13.2cm、底径 5.3cm、器高 3.1cmで、器高が浅くて、皿形に近い。底部は回転糸切りにより切り離されている。胎土には粗粒砂が少し含まれ、焼成は良好である。色調は灰白色で、残存率は60％である。24は口径12.6cm、底径 6.3cm、器高 3.5cmで、底部は回転糸切りにより切り離されている。胎土には粗粒砂が含まれ、焼成は良好である。色調は灰褐色で、残存率は70％である。



第７図　上辻遺跡Ⅱ区全測図



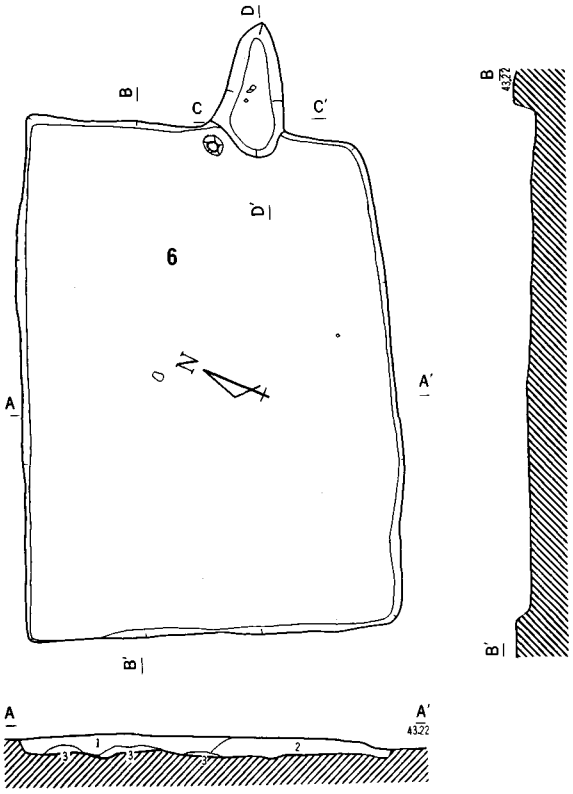


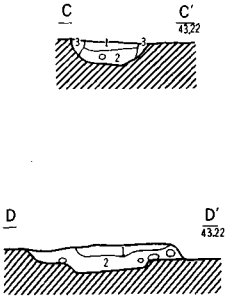
A－A′

1．褐色土
2．暗褐色土（ローム粒子、ブロックを含む）
3．暗褐色土
4．暗褐色土（ローム粒子を含む）
5．黄褐色土

C－C′・D－D′

1．褐色土（砂質）
2．暗褐色土（ローム粒子を含む）
3．暗褐色土（ロームブロックを含む）
4．黄褐色土（ローム質）
5．黒褐色土（焼土ブロックを多く含み、ロームブロックも含む）



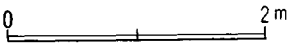


A－A′

1．褐色土（ローム粒子を少し含む）
2．褐色土（ローム粒子、ブロックを含む）
3．褐色土（ロームブロックを多く含む）

C－C′・D－D′

1．黒褐色土（焼土粒子、ブロックを含む）
2．暗褐色土（ローム粒子、ブロックを含む）
3．暗褐色土（ローム粒子を含む）



第８図　５・６号住居跡実測図

II区

5号住居跡（第8図、図版9－1・2）

規模は東西2.75m、南北2.45mで、長方形を呈す。主軸はN－69°－Eを示す。壁の深さは30～15cmで、壁溝は検出されなかった。カマドは東壁に認められ、燃焼部と煙道部は壁外へ1.66m掘り込まれていた。柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

5号住居跡出土遺物

本住居跡からは、遺物の量は少なかった。土師器の坏・甕の破片、須恵器の蓋の破片等が検出された。

6号住居跡（第8図、図版10－1・2）

規模は東西 3.9m、南北 2.9mで、長方形を呈す。主軸はN－69°－Eを示す。壁の深さは15～7cmと浅い。カマドは東壁に認められ、全長1.04m、燃焼部幅56cmである。壁外には82cm掘り込まれている。壁溝・貯蔵穴・柱穴は検出されなかった。

6号住居跡出土遺物

本住居跡からも、遺物の量は少なかった。カマドの焚口部の北側には、完形に近い高台付の坏が検出されたが、大部分は土師器の坏・甕の破片、須恵器の坏・甕の破片等であった。

註　土器の記載の中で、胎土に含まれる砂・礫の大きさは、下記のとおりである。

細礫4～2㎜、粗粒砂2～05㎜、中粒砂05～0.25㎜、細粒砂0.25～0.06㎜

第2表　II区住居跡一覧表

住居跡No.	規模(m)	主軸方位	カマド位置	ピット	貯蔵穴	壁高(cm)	時期	備考
1	2.80×3.05	N－57°－E	東壁、東南寄り	2		40～30	真間	
2	5.50×	N－37°－W	北壁、北西寄り			40～30	鬼高	
3	4.70×3.50	N－60°－E	東壁、東南寄り	4	1	50～45	国分	
4	5.20×3.40	N－71°－E	東壁、東南寄り	1		55～45	真間	紡錘車出土
5	2.75×2.45	N－69°－E	東壁、東南寄り			30～15	国分	
6	3.90×2.90	N－69°－E	東壁、東南寄り			15～7	国分	
7	3.05×3.65	N－54°－E	東壁、東南寄り			7～1	国分	
8	2.90×2.60	N－57°－E	北西隅	3		25～15	国分	埴輪出土
9	3.80×3.25	N－66°－E	東壁、東南寄り	2		30～15	国分	鉄滓出土
10	2.45×	S－35°－E	南壁、南東寄り	1		30～25	国分	鉄製品出土

V．下 辻 遺 跡

1．遺跡の概観

下辻遺跡は、上辻遺跡と同じ荒川左岸の自然堤防上に立地しており、上辻遺跡の北側に位置する。

今回の調査は、道路及び排水路が作られる部分のトレンチ発掘を行った。トレンチは5本設定し、長さは道水路の長さに応じて 100m前後とした。トレンチの幅は1mだが、地点によって出土状態の良好な住居跡が検出された時は、幅を2m又は3mにした。トレンチは、北から1T・2T…と呼称した。1Tからは住居跡8軒、溝跡7本、ピット9、2Tからは住居跡3軒、溝跡1本、ピット4、ピット群2、3Tからは住居跡4軒、溝跡2本、ピット3、4Tからは住居跡5軒、溝跡5本、ピット8、5Tからは住居跡1軒、溝跡3本、ピット5がそれぞれ検出された。合計すると、住居跡21軒、溝跡18本、ピット29、ピット群2となる。

1T 8　4T 2
2T 2
3T 4

2．遺構と遺物

現在、遺物整理の途中であるので、次に各トレンチごとの遺構及び遺物について、ごく簡単に述べたい。

1Tで現在、時期のわかる住居跡は、1・3・5・7号住居跡で、すべて国分期のものと思われる。3号住居跡から土器以外に砥石が出土し、5号住居跡からは灰釉陶器、砥石、軽石及び多くの炭化物が検出された。5号住は、火災を受けたと思われる。

2Tで時期のわかる住居跡は、2・3号住居跡であり、どちらも国分期と思われる。3号住居跡は、カマドから多量の土器が出土し、床面から鉄製品も検出された。

3Tの住居跡は、全て真間期のものと思われる。1号住居跡からは、多量の土器が出土し、灰釉陶器も検出された。又、1号住居跡と4号住居跡からは、土錘が出土した。

4Tは、4・5号住居跡が国分期と思われ、他の住居跡の時期は、現在のところ不明である。4号住居跡は、カマドから鉄製の鎌が検出され、5号住居跡からは多量の土器が出土した。1号溝跡は国分式土器、2号溝跡は五領式土器が、それぞれ底面から出土した。

5Tは、良好な遺構があまり多くなく、出土遺物も少なかった。3号溝跡は掘り方が深く、比較的良好に残っており、国分式土器も出土した。

Ⅵ．ま と め

上辻・下辻遺跡の調査によって、既述したごとく、奈良時代、平安時代の住居跡が多く検出され、古墳時代の住居跡は1軒だけ検出された。

奈良・平安時代の住居跡は、上辻遺跡Ⅰ区では北向きのカマドが9基と多く、東向きが5基、南向きが1基と少なかった。東向きのカマドのうち2基は、北向きのカマドとともに併設されていた。上辻遺跡Ⅱ区では、東向きのカマドが7基と多く、北向き、南向き、西向きのものが各々1基と少

なかった。このように、Ⅰ区は北向きのカマドが多く、Ⅱ区は北向きのものは1基で、東向きのものが大半を占めていた。この2地区は、同じ自然堤防の東側にあり、約 100m離れている。カマドの主軸方向によって、上述のような傾向が伺えるが、このことにより、Ⅰ区とⅡ区で、各々独立した住居群の単位としてとらえられるかもしれない。

カマドの構造としては、燃焼部、煙道部が壁外に掘り込まれているものが多く検出された。カマドの袖に細長い川原石を垂直に埋め込んで、袖を補強しているものも若干認められた。

住居跡からは土器以外に、多くの川原石が検出された。編物石として使用されたと思われる幅3～5㎝、長さ10～15㎝の川原石の他に、幅10～15㎝、長さ20～25㎝の大きなものが、住居跡の覆土及び床面から数多く検出された。大きな川原石は、住居を廃絶する時に投げ捨てられたような状態で検出されたが、投げ捨てられる前に、何かの道具として使用されていたかどうか、使用されていたとしたら用途は何か、又、なぜ投げ捨てられたのかは、今後の課題である。

溝跡は、上辻遺跡のⅠ区で2本、Ⅱ区で1本、下辻遺跡で18本検出された。上辻遺跡Ⅰ区の1号溝跡、Ⅱ区の1号溝跡は、出土遺物が少なく年代が明瞭ではないが、平安時代の住居跡が上に載っており、古墳時代にさかのぼる可能性もある。下辻遺跡の溝跡は、幅1ｍのトレンチで確認されたものであるから、年代の不明なものが多いが、底面から五領式土器を出土するものや国分式土器を出土するものがあった。

ピットは、30数個検出された。ほとんど性格のわからないピットが多い中で、下辻遺跡の2Ｔの4号ピットは、焼土と土師器が多量に出土した。これは、土師器を焼いた窯跡の可能性があると思われる。

土器は、多量の土師器、須恵器の他に、灰釉陶器も検出された。今日、灰釉陶器の年代が問題になっているが（註1）、そのことを考えるのによい資料となるであろう。

註1　高島忠平「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」　考古学雑誌57巻1号　昭和46年

図　　版

上辻遺跡・下辻遺跡航空写真

図版２

１．上辻遺跡Ⅰ区全景

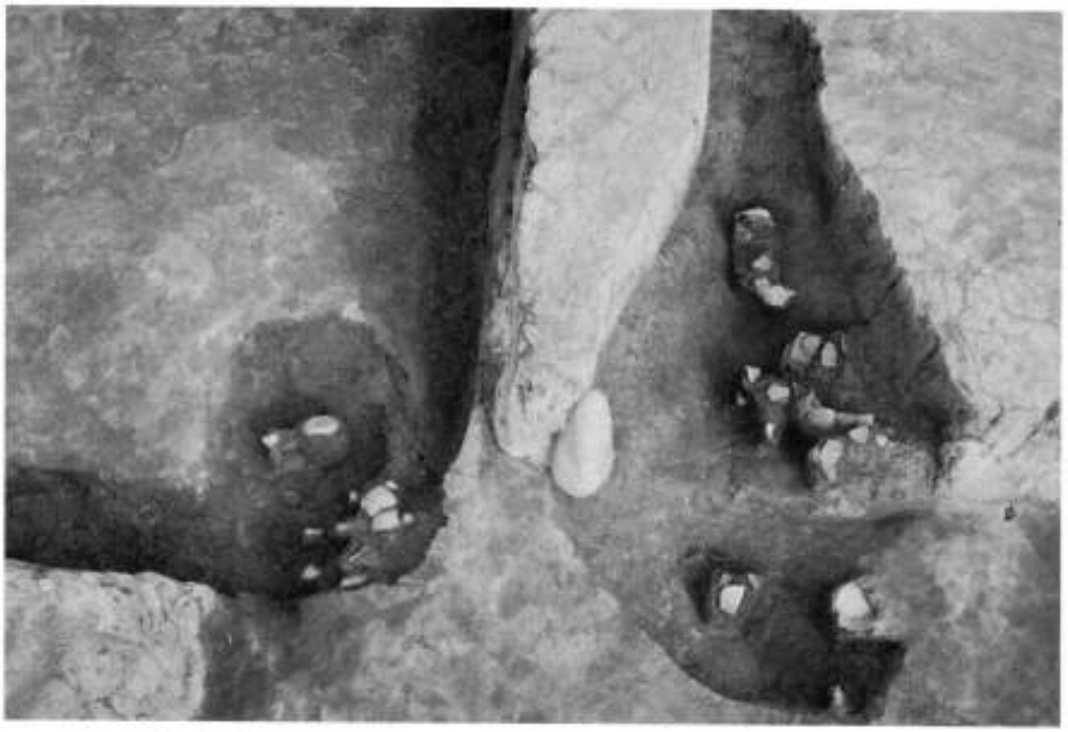
２．上辻遺跡Ⅰ区南半部

１．Ⅰ区１・２号住居跡

２．Ⅰ区３号住居跡

図版４

１．Ⅰ区２号住居跡カマド



２．Ⅰ区３号住居跡カマド

１．Ⅰ区11～14号住居跡

２．Ⅰ区12号住居跡カマド

図版6

1．上辻遺跡II区全景

2．II区1～4号住居跡

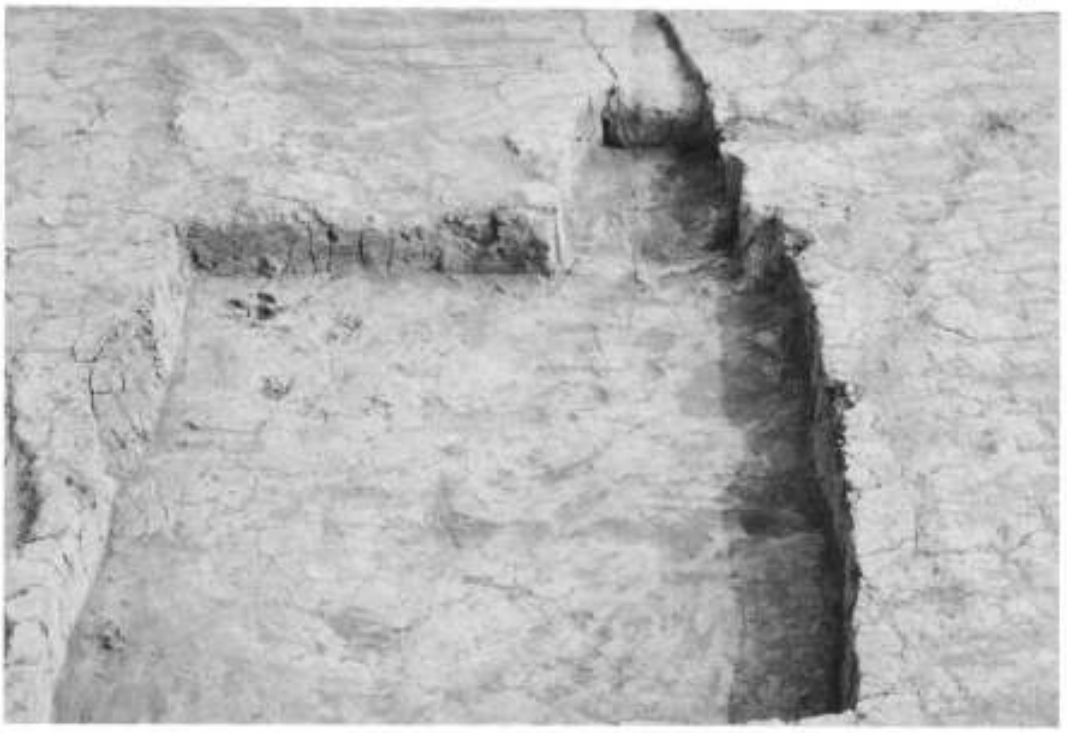
1．Ⅱ区２号住居跡遺物出土状況

2．Ⅱ区２号住居跡遺物出土状況

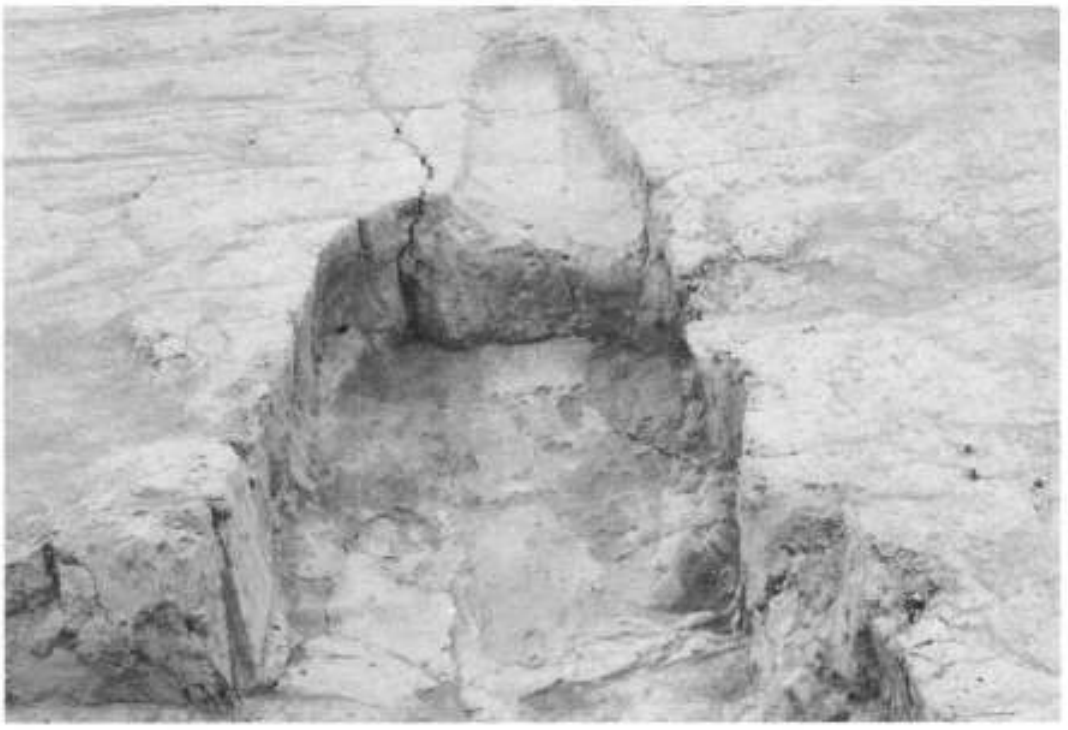
図版８

１．Ⅱ区２号住居跡遺物出土状況

２．Ⅱ区２号住居跡遺物出土状況

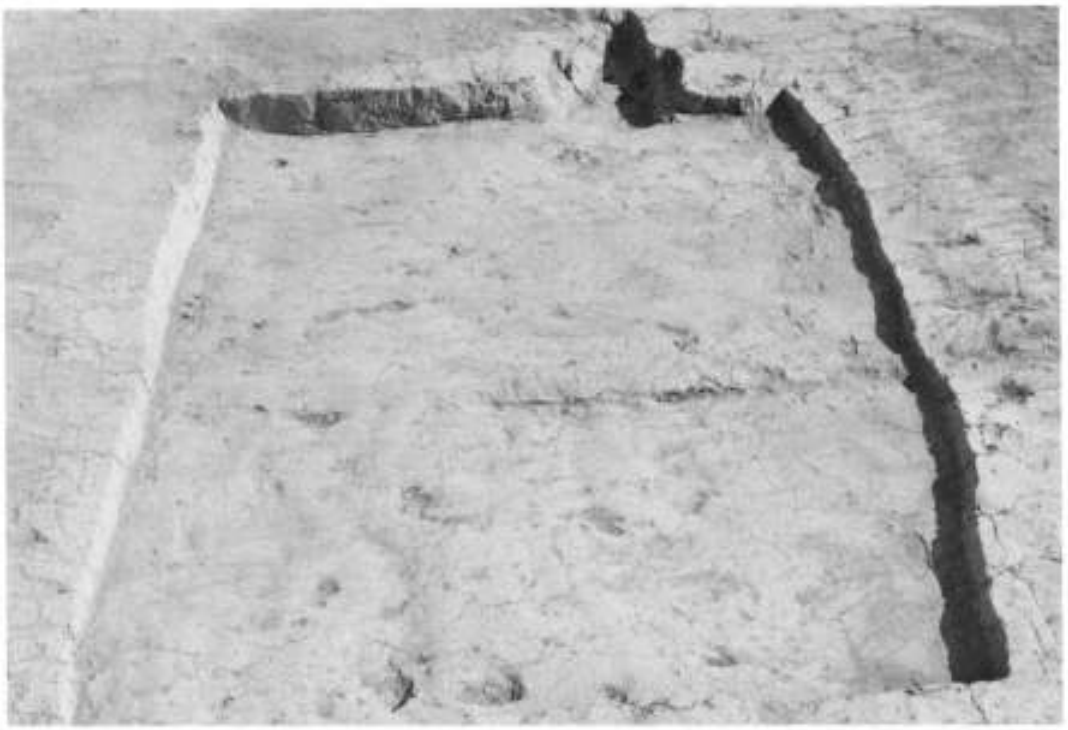


１．Ⅱ区５号住居跡



２．Ⅱ区５号住居跡カマド

図版10



1．Ⅱ区6号住居跡

2．Ⅱ区6号住居跡遺物出土状況

昭和56年　熊谷市埋蔵文化財調査概報

三尻遺跡群・上辻遺跡　下辻遺跡

昭和57年３月31日発行

発　行　埼玉県熊谷市教育委員会
印　刷　有限会社　誠光社印刷所